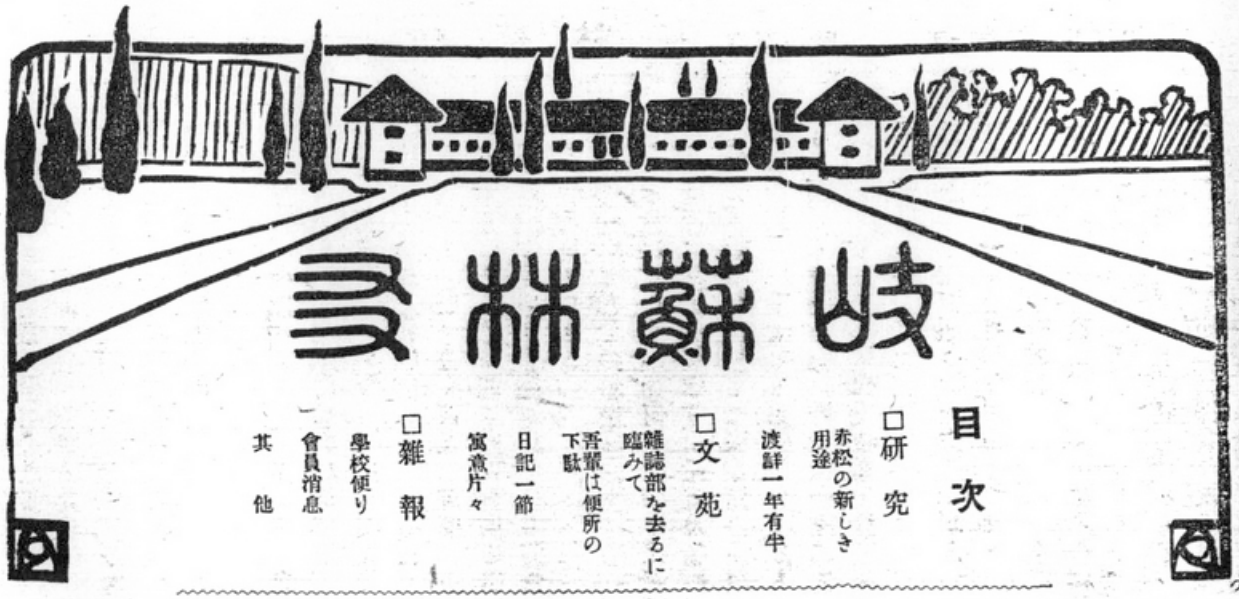

目次

□研究
赤松の新しき用途
渡鮮一年有半
□文苑
雜誌部を去るに臨みて
吾輩は便所の下駄
日記一節
寓意片々
□雜報
學校便り
會員消息
其他

大正七年三月廿五日　第百壹號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

研究

赤松の新しき用途

木下　稗藏

一、水道木管に就て

本邦に於ける水道木管の製造は日尚淺く未だ其の研究充分なりと云ふを得ざるも近時識者の間に種々講究せられたる結果鐵管に比し

一、耐久程度は鑄鐵管に伯仲し鋼鐵管の四倍なること

二、鑄鐵又は鋼鐵管より非常に廉價なる事

三、重量輕く取扱容易にして運搬費の少なき事

四、接合に鉛、卷はだ等の充塡を要せざる事

五、容易に且つ安全に敷設し得る事

六、敷設費極めて少なき事

七、簡易なる架空索道を以て架渡すべく且つ風に動搖さるゝも木管特有の撓性に因りて漏水の憂なき事

八、鐵管の如く伸縮の憂なき事

九、震災の爲め破損の憂なき事

十、氷凍の爲め破損の憂なき事

十一、鐵管の如く電流に因る腐蝕の憂なき事

十二、如何なる太さの木管にても現場にて組立て得る事

十三、鐵管の如く水温を變せず夏季は冷く冬季は温くして最も衞生に適へる事

十四、鐵管は水質を變ずるが故に釀造、製糸、精煉、染色等に適せざるも木管は更に此憂なき事

十五、鐵管を以て温泉、鑛泉、海水等を輸送すれば直に腐蝕して用に堪へざるも木管は此の憂なく且つ温度を保持する事

等の特長あるを認められ且つ現今世界的戰役の影響を受け鐵類の需給困難なるを以て木管の需用頓に增加し上下水道用、鑛山排水用、耕地整理用、製糸場及精煉場給水用、温泉用、埋立排泥用、水力電氣用、鐵道船舶給水用、瓦斯又は通風管用等諸般の用途に供せらるゝに至り從て之に要する木材の需用も增加し各地に於て注目さるゝに至れり

余は幸に直接其衝に當れるを以て聊か見聞せし所を記し余白を汚さんとす

二、赤松は木管材料として最良なり

仰も木管の材料は其製品の性質上より其耐久力耐壓力の强弱及蓄積の多少を以て撰擇上の三要件となせり

各種木材の水道木管としての耐久程度は本邦に於ては未だ其使用、日尚淺く實驗の徵すべきものなしと雖も我國に產する樹種中、地水中用材として最も其保存期長きは檜、赤松、槇、金松等にして就中檜は最も長きは既に學說實驗上に明かなる事實なり

然れども檜は蓄積及價格の点より其供給充分なりと云ふべからず加之貴重なる建築材なるを以て使用するに忍びざるものあり、然るに赤松は其蓄積最も多量にして保存期は檜に對し聊か遜色なきにあらざるも他の樹種に比し劣る事なし

又耐壓力は松類にありても内地産の赤松最も優良にして水壓試驗の結果朝鮮松、紅松、落葉松、エゾマツ等は百封度の水壓に對し木理より浸出して成績不良なれども内地産赤松は普通百五十封度に耐へ特製木管にありては能く三百封度の高壓に耐ゆ故に内地産赤松を以て最も適當なる木管材料となせり

三、木管材料としての赤松

凡て木材は其用途の如何を問はず伐採季節の適否は材質に及ぼす關係重大なれども特に木管材料に於ては保存期の長短水壓の抵抗力に重大なる關係を有するものなり而して普通建築材料とは余程其趣を異にするを以て其撰擇上特種の注意を要す、弊社に於ては此点に付創立以來の經驗に基づき左の如き檢査方針を制定し一丁毎に檢査の上採用する事となせり

木管材料檢査方針

左記各項の一に該當するものは不合格材とす

一、伐採後一個年以上經過したるもの

但し適當なる季節に伐採したるものにして材質惡變せざるものは此限りにあらず

二、伐採後水中に貯木したるもの又は筏及管流に依り搬出したるもの

三、規定の寸法に充分なるもの（長さは五寸以上のノビを付する事）

四、規定の寸法充たざるも曲りの甚だしきもの

五、徑一吋以上の死節あるもの及び徑一吋以下なるも所謂コバ節あるもの

六、生節なるも甚だしく大なるもの

七、細菌其の他の作用に依り變色し材質不良となりたるもの

八、ヒワレの甚だしきもの

九、ヤニブクロ及びイリカワの甚だしきもの以上各項に該當する缺点なきものと雖も一見材質粗惡にして水壓に耐へざるものと認めらるものも亦不合格とす（完）

（大日本水道木管株式會社にて一月廿日記す）

渡鮮一年有半（承前）

坂本光太郎

國境にて

K君は輜重兵に。曩に徵兵檢査の爲め歸鄉した、C君は歩兵に共に合格して來て居た

茲に香りゆかしきアカシヤの下に。蘇門出が都合五人集つた譯で一日安東軒に於て蘇門會を開き愉快に語つた事があつた。

△夏の新義州

冬は零下六十度迄も下るが。夏はそれ相當に熱い天、雨を降らざる事數旬草木將に枯れんとすと云ふのは此頃の日和を指して云ふのであらう。廠内にありて雖も身は恰も紅爐中にあるが如く流汗淋漓たりである八百屋の店頭には、色々の美しい。果物か山と積まれ氷屋の軒には白く氷と染め拔いた青い旗、赤い提灯がヒラ〳〵ブラ〳〵してこれ又仲々の繁昌で此處ばかりには涼しい空氣が漲つて居る。ニーヤのマークワマイマ。バショーノミ、アイスクリーンの涼しい呼聲も街に漂ふて居る。

或晩活動寫眞を觀に行つた、内地人の辯士と朝鮮人の辯士は朝鮮語で交互に喋つてゐた成金連は今や須磨に明石に江の島に熱海に和歌の浦に三伏の暑氣を避ける時、吾々官吏の端切れは毎日特動特動で午后の六時頃迄扇子片手に復命書調製の爲め役所に繫がれ、江岸に一掬の涼味を味ふ暇もなく新義州滯在も僅か三週間にして再び平安北道江界郡干北面へ出張を命ぜられた。

△仙人生活

禿魯江の一大支流干北面の全部にして別河里事業區と命名し、此面積五萬二千餘町歩江界と距る東北へ八里別河里より四里の地点にして交通の不便なる處である。別河里は鮮人家屋二三十戸集團する一小部落であつて内地は憲兵さんが二人と公醫が一人である。郵便物は此處の憲兵さんに留め置いて貰つて一週間に一度或は雨でも降つて退屈な日にはヨボを傭ふて取りに遣る。何より樂しみなのは手紙の來るので使の歸りを鶴首して待つて居る。

紙質の弱い封筒などは横腹が擦り破れて居る樣な事がまゝある。

新聞は大坂朝日と鴨江日報と取り寄せて居たが、新聞でなくして十日乃至二週間も前の舊聞であるからやりきれない、それも毎日は見られない、取りに遣つた時のみで四五日分一緒に來る。さうすると我勝ちに今日の新聞はどれだなどゝ十日も前の舊聞を目玉を丸くして廣告の番地迄も一々讀むで見る。立太子式の御祭騷ぎなど都の人々は最早や昔夢となつて忘れて居る頃、此方では何處には提灯行列があつた、何處では何の催しがあつて非常の賑やかだなんていつて喜んで讀んで居る。

一ヶ月に一二回は江界から郵便の配達夫が來る事がある、此配達こそ浮世の事情を知らして呉れる唯一の機關である、此れが來なければ全く浮世と離れて、山奥深く超然として仙人生活を送らなければならぬ。又配達夫は切手や葉書を携帶して要求に應するから、此邊の人からは天使でも來たかの樣に感するのも無理はない。これは普通な場合で、特に急を遠き所に知らする要ある場合は、特使と言つて特別に人夫を出して最も近き道を出來るだけ早く歩いて先方に行き目的を果たすのである。

次ぎには里送りと云ふ事で里から里へと轉々として、最終の地点に文書を屆ける方法である。何と云ふても郵便局から十里十五里と隔れて居てポストは面事務ある所に只一個のみで文書の發送は郵便に依る事がなく總てか此二方法によるので あるから、其不便なる事は内地にある諸君の夢想だにすることの出來ぬ有樣である。

斯く聞いてさへ文明の風に吹かれぬことは略御解りでせう。

「礒節の作り替へ」

浮世はなれて奥山すまゐ、義理も人情も忘れて居たが、驢馬の鳴く聲聞けば、内地が戀しくてならぬ。チャ〳〵。

穢い事と不便な事を厭ふて居たら、朝鮮では生活が出來ない。穢い一例としては何處へ行づても、田舍には小便所としてはない大便所はあるが豚小屋と共同にて下には豚公が駈け廻つて居る。上で足音がするや、心得たりと鼻を蠢かして滿月を仰いで居る……頸といはず脊といはず……其中にはブル〳〵と身震いをする……が四方八方へ飛散する。實に氣持ちが悪い。それ故夜中に青天井を戴くのであるが犬の先生が二匹も三匹ものそ〳〵やつて來るので、石の用意をしてからなければならぬので困る。穢い汚は限りが無いから此位にして　次に聞くだに垂涎を催さすは、朝鮮の山葡萄である。其豐富にして味の佳なる事は云ふ迄もなく、殊に之れを絞り砂糖を混じて即席葡萄酒を作るのであるが此美味しさは甘露にも優れて居る。

次ぎに美麗なるは朝鮮の山薔薇で春は野面に眞紅の蕾を破りて薄紅に咲き亂れ、秋はほゝづきの如き實を澤山に結び恰も提灯行列を以て吾々を送迎する觀がある。

朝鮮に住つて朝鮮の氣候を賞めぬものはない、夏季の外滅多に降らぬ、殊に秋と來ては朝鮮第一の好時節である。澄み渡つた空氣の何ともいへぬ快よさ、肺臓の中が拭き清められる樣な氣がする、斯樣に空が乾燥し過ぎ往々にして呼吸器を害する事がある此頃は農作物の收穫期で何處の家の前にでも數人のヨボが輪になり、連架を以て蕎麥や蒸麥のヤタ打を盛にやつてゐる。之れを行ふに大抵は土面で蓆などを用ひないから朝鮮の穀物には砂が多い。

今日は九月二十六日暑い寒いも彼岸迄と云ふ事があるが、今朝は初霜を見た、二十九日の朝は成南、平北兩道界のワイガル峯に初雪を見、十月の中旬には里の平地へも降つて來た、或日身体の洗濯をすべくヨボに言ひつけて湯を沸させ、戸外にて例の湯浴びをしたが、其の日は折惡しく寒かりし爲め風邪に冒され、二日程キナピリンの厄介になり、遂ひ咽喉を痛め、別阿里に出で藪醫者の診察を受け、水藥三日分を貰ひ一圓八十錢の支拂をして歸つた事もあつた。藥價も斯く高く少し重病にでも罹つて醫師を一回頼んで來るにゝ、一寸拾圓はかゝるのである。加之不便であるから急病には間に合はぬから、こんな處で病氣でもしたものなら見殺しの狀態である。

左に干北面舞仙洞に在りし時一支人に宛たる書信の一節を掲げて見やう。

★　★　★　★　★

鳩の頸につけて！

拜啓其后の御無沙汰何卒御海容被下度候、時あだかも天高く空晴れて、馬肥ゆる好シーズンと相成候處貴兄には別に御變りも無之候や。降而愚生事なく江界郡は此處、于北面の片田舎にて毎日ヨボを相手に見取板と首引きを爲し居り候間乍他事御安神下され度候。

北鮮の里へも秋は訪づれ木の葉は紅く黄色く野山を色彩りしか何時か落ちるものは皆落ち枯れるものは悉く枯れ果てゝ四方の山々痛せ山骨稜々昨今はめつきり晩秋の景を裝ひ來り候。

然しながら萬山燃ゆるが如き紅葉に包まれさながら畫圖の中に遊ぶ感ある曾山の錦は何處に至るとも探る事不能此の時に當り蘇峽の昨今がおもひ出されなつかしさ胸に迫り申候。

新義州出發以來一度も浴みせざる此身に、シラミの發生するも不思議なく、あつたら好男子も色は赤銅の如く、髮鬚茫々たるイルボンサラミをヨボの恐れるのも無理なき事と存じ候。

今宵は八月十五夜、仲秋の明月は皎々と隈なく冴わ亘りて吾が頭上にも照り別河里の川は清く流れ其影を映して囁けども吾胸は晴れやらず、吾と語ふ人もなき淋しき自分は唯一人、人里隔れし國境近き此仙郷に立ちて獲れし姿を地上に落して、東遙に故郷の空を望み

夕空晴れて秋風吹き月影落ちて、鈴虫鳴く、おもへば遠し故郷の空、嗚呼我父母如何におはす……。

澄みゆく水に秋萩垂れ、玉なす露はすゝきに滿つ、おもへば似たり故郷の野邊、あゝ我兄弟誰れと遊ぶ……。

と嘯く時叢に悲哀の秋を語る秋蛩のメロディーもいとしめやかに彫り着けられ候。猿丸太夫ならずとも、奥山に紅葉踏みわけ啼く鹿の聲聞くときぞ秋は淋しく新義州へ凱旋の日を朝な夕なに指折り數へて待ち憧れ居り候只今夕飯を濟して一本の蠟燭を便りに虱狩りを催したるに吾輩が一番得物澤山にて米粒大の親虱が數匹、兒虱三十餘匹にして卵の數は一寸計算し兼ね候に付また何れ餘暇を得て計算し詳細報告致す可く候。

世人天高く馬肥ゆる候と申せども實際吾人はやせる候に御座候呵々!!!

貴兄昨今の感想や如何？定めし同感の事ならんと推察致し居り候（中略）

時をり内地のおもしろき談ぉん漏し下され度候。尚書きたき事はあれど、身はいとど疲れ居り筆さへも自由に走らず候故餘は後便にゆずり今日はこれにて筆を擱き左に只今棟習中の鴨江筏節の二三を御紹介致さん（筏節省畧）後便には目下新義州にて流行の新磯節の粋な處を御披露することを約し置き候終りに望み燈火親しむべきの時に當り御自愛專一に折角の御勉强を念じ上げ候

早々不一

大正五年菊月十二日の夜温土爐にて獐の啼聲を聞きつゝ　岐蘇仙人

音もなく只そよ〳〵と吹く風に
思ひ出にけり故郷の秋……

★　★　★　★

後期の出張も茲に終りを告げ十一月十一日雲洞站を出發して歸廠する事となつた。其夜面長、里長、地主總代其他有志二三名のものが相寄り、吾々の爲めに送別會を開いて呉れた。持ち出された御馳走は鷄、卵、漬物、蕎麥、豚肉、朝鮮酒、蜂蜜等にてあるが酒は日本酒と原料を異にするので、吾吾の口には合はない、それで初めの中は砂糖或は蜂蜜を入れて飲むのである。

持ち出だされた御馳走を圍み互に杯を、さしつさゝれつ醉も程よく廻り宴酣になつて來たが風俗習慣を異にし、言語不通の間がらにて如何ともする事が出來なかつたが、此處に一興を案出したそは「雷遊び」といふ室内遊戯であるこれは御承知でせうが、或一人が眼を閉ぢ大きな聲にてゴロ〳〵ゴロ〳〵……と唱へ或一点より帽子なり本なり取り廻しに都合好き物を順次手傳ひに雷の鳴つて居る間は廻して遣りゴロ〳〵……ドッシンといつた時に其物を持つて居た人即ち落雷した人が十八番をやり、次には其人が雷になるので此遊戯は少々言葉位解らんでも面白いので適當して居た。

通譯の口を借りて詳しく此説明をなし開始したがヨボ共は非常に興味を以て戯れ、朝鮮唄に朝鮮踊日本唄に日本踊り各自十八番を出して其夜は愉快の裡に明け翌日は于北面を後に積雪を踏んで夕方別河里に着き一碗二十錢の支那うどんに空腹を醫した時の事はいまだに忘れない。

身を覆る樣な寒い風をマントルの襟で避けながら、十一日間にして新義州へ着いたが雪の爲めに足は少々凍傷に罹り風の爲めに唇はすつかり荒れてしまつた。

△冬の新義州

アカシヤもヤマナラシも梢あらはとなり、木枯し吹き荒ぶ十一月も過ぎ十二月も末となつた、朝鮮には三寒四温といふて三日寒く四日温い氣候の調節があるが、近頃は此調節も破れてあてにならぬ、室内にありてさへ零下三十度である、此調子では一月二月は最も寒いさうだが如何なる事であらうか。

先頃入營して來た守備隊の兵隊でさへも毛糸の覆面をして帽子を戴き、身には長い毛裏の袖無し（ネンネコ）の樣なものを軍服の上に着て手には親指のみ分離した大きな大きな叺の如き手袋に紐をつけ胸から懸けて徒歩教練をして御座る。

雪は想像したよりは少ない、多くて五寸位つむが風が烈しいので二三日の後には何れへか姿を隱して砂塵が起ち卷いて居る、寒氣の强い朝などは廊下を少し歩いても鼻毛が凍り夜など二三丁行く間に目の玉が結氷し耳も頬も感覺を失つてしまふ、其の時分こんな滑稽な談があつた。

朝お早うといふても向の人は返事をしないから口が結氷してよう物を言へないのかと思つたら其れが途中で結氷してゐて晝頃少し暖になると、やうやく解けて「お早う」「お早う」と聞ゆるさうだ、之れは本統の嘘話であるが此處に嘘の樣な本統の話があ

る小便所には内地人の想像にも及ばぬアイスクリームの山が築かれる、實際凍らぬものは火と鼻の下のみ、呵々!!!

會者定離は浮世のならひと言ひながらO君M君は曩に豐橋、金澤の各聯隊へ入營し今亦O君は和坪面釜内洞營林廠派出所へ轉勤の爲め十二月三十一日此の地を去りI君と二人になつてしまつた。（未完）

文苑

雜誌部を去るに臨みて

横井生

木曾山林學校々友會雜誌部に入りて、こゝに三年、今や大正第七の新春を迎へ、正に雜誌部を去らむとするにあたりて、本部に於ける所感を述べて見たいと思ふ。先づ現在校友會に於て、どれだけの林友を發行して居るかと申しますに、毎年〳〵增加しまして只今では、月々七百部の多數にのぼつて居ります。その多數の林友が又如何に、配布せられつゝあるかと申しますに、内地に於ける各府縣は云ふに及ばず、遠く樺太朝鮮、臺灣及外國にいたる迄、殆んど「岐蘇林友」てふ吾が校友誌の行かない所は無いといつても過言ではありますまい。之は誠に吾が校友會として、此の上もない喜ばしい事と思ひます。されど、かゝる喜ばしい半面に於ける現在の雜誌部の狀況は如何先づ豫算について申せば、去年までは月々九圓位でこしらへられたものが、物價騰貴の今日に於ては、拾二圓位も出さなければこしらくてもらふ事が出來ぬの事で、いつしか豫算は超過といふ有樣である。次に今後吾が校友の數といふものは、どこまで增加して行くのであらうか。或は何千或は何萬となつて行く事は、誰が考へて見ても明かである。そうすれば、それが發送は如何になすべきか。現在に於ける七百部位の發送にすら、部員の都合の惡い時などは三日も四日もかゝる。それは勿論放課後であるけれ共、殊に試驗近くの月になつては、二三の部員しか出てくれぬために、中々手間を要する、こゝに於て所謂「林友改革論」とでも云ふ樣な、問題をかつぎあげて、どうにかしたらよからうと思ふ。此の問題については今日まで紙上に於て、或は内容上の改革或は形式上の改革について、大分見受けた樣である。なるほどそれ等の問題も必要である。しかし、現在の豫算及原稿の

狀態に於ては、不可能な事であらうと思ふ自分はこゝに於て、それが改革につき、聊か卑見を述べて見たいと思ふ。それはあまり輕々しい考かも知れぬ、しかし乍ら早晩この問題がおこる事であらうと思ふ。要する所自分は「一ケ月おきに發行したらどうか」といふのである。そうすれば經費も今迄の二ケ月分が一ケ月になり、記事も豐富となり、發送に要する手數も半分となる。そうして現在の林友を雜誌形（中學世界農業世界に於けるが如き）となし、頁數を四十頁位とし、內容形式ともに他より見て、恥づかしく無い校友誌としたい。これはそんなにむつかしい事ではなからうと思ふ。一ケ月おきに發行すれば年に六回のわけであるが、かくしてもそんなに不都合はおこらないと思ふ先輩諸兄に聞いて見ると、一番早く見たいのは、會員の異動位であるがそれだつて、一ケ月早く知つたからどう、一ケ月遲く知つたからどうだと云ふ樣な事は無いといはれる。まあ、改革についての卑見は、この位にして筆をとめ、次に發送に要する宛名についての所感を述べて見やう。これには部員の方でも、充分注意をして居るが、それでも、おり〳〵とかへつて來る。之は今日に始まつた事では無い、僕が雜誌部の人となつてから、この方三年、これぱかりは不思議に相變らずである。しかし其の原因を尋ねて見ますに、何れも「不在」或は「轉勤」「當署にはかゝる者無し」と符箋がついて來るそれかといつて、校友會の方へは何等の通知もきて居ない。やむを得ず一先づ發送を停止せねばならぬといふ樣なわけになりますが、それ等の事はお互に一錢五厘で事のたる事であるから早速校友會の方へ通知がしていたゞきたいと思ふ。次に原稿の事であるが、矢張りお役所の仕事がいそがしいために、筆をとる暇が無いのか、どうふものか、いつも投稿せらるゝ人は、おきまりで何となく心細くてならない。今少しこの方面へ意がそゝいでもらひたい。しかし在校生の作を集むれば、大丈夫十二頁位の紙面はふさがつてしまひますが、在校生の頭位では、いかに大風呂敷をひろげて見ても高がしれて居る所謂價値なき記事をもつてみたされるといふ譯になる。こゝに於て吾人は「林友誌寸感錄」の作者では無いが吾等が敬愛し信賴する先輩諸氏の「誌上」に於ける活躍を渴望して止まないのである。

吾輩は便所の下駄（三）

白菊

或晩の事だ母屋の娛樂室で室長會が開かれた。夫で此處で云ふと僕見た樣な古參の人がづらりと列んで、何だ彼だと種々極り切つた事を決議する。それが決定すると君の樣な新參者がしほ〳〵と入つて來る、常には大聲で白だ黑だと碁石を爭つたりワンのチユウのと犬や鼠の樣な騷ぎをしてピンポンと紅白の球を飛ばせて大はねくりをし又あの猫が緣側で晝寢をしてゐる樣に日が當つて茶色に光る背の上へ吾輩は便所の下駄ではない猫であると夏目さんの樣に長々と寢ころんで雜誌や新聞を見、友人に耳ざはりを云はれた時などはあゝ面白くでもない娛樂室へでも行かうとつぶやく程呑氣な所だが其後は職員室か舍監室へ行くよりもこの說法室と變つた娛樂室へ行くことが恐ろしく思はれてゐる。扨て古參が驚揚に安座して睨めてゐる前へ驚に捕まつた小雀同樣恐る〳〵低頭して座すると組長とか云ふ人が出見を取る次には十八番の「ヤ　皆御苦勞」と一寸上げる、この上げられた時は御同樣。至極氣持はいゝが次が險呑だ、すぐ下されるからなあ。この自然の法則は流石の人も免がれない、すぐ「今夜諸君に集つて貰つたのは外でもない吾々室長が心付いた事を注意しようといふので舍監先生の許可を受けて集つて貰つたわけだ」とそろそろ落とす番だ「注意事項は先づ第一に」と卷紙をひろげる、此卷紙のほぐれる樣に續く注意事項の中に「便所の下駄を揃へおくこと」といふ一項がある「そんなに吾輩に同情してくれるんだね吾等もちよい〳〵そいつをやられて時々兄等に臀を向けたり頂戴したりして氣の毒に思つた事もある」と古參の下駄に囁くと「君はそれだから新參だよ其んな同情家は實際米のあらしかないんだ君等に取つては頭を便所の方へ向けて

揃へて置かれると話が出來て嘸滿足であらうが僕の位年を取るとあの頭を便所の方へ向けておかれるのが何よりつらい、腰が冷わてセンキが起るやら痔痛がするやら特に今年のやうにしみては僕の命も永い事はあるまいと思はれる、此僕の大嫌の列べ方が又馬鹿に人には都合がいゝんだ直ぐど御役に立つから」「そうだね君にそう云はれて見れば胸に落ちるそれから」と催促すると「まあ話をするに好都合といふ樣に吾々御同役の便を計るともなしに計ると其夜の內からめつきりと揃へるがどういふものか長く續かない、吾々の仲間が「又下駄を揃へよと注意されとさ」と噂してゐる內に木を葉の散つた樣になる。吾々は此處に居れと命令などされなくとも自分の都合不都合に關せず置かれた所から星は落ち日はかげゝとも月は傾かうとも寸分動く事でない、それを人間は僕等の都合など一切お構ひなく自分達の足に最好都合にすべくしておき乍ら夫を遂行せぬのだから實際憐むべきものだよ僕等は人間に使はれるから人間を尊重するが併し斯樣な事では餘り靈長らしくもなく思はれる併し其の注意を守らない人許りではない吾々の樣に涙のない者が催す位、感心な美しい心掛の人もある其人々は人が見やうと見まいと之は吾が義務であると思つてゐるでせう自分が小使をするといふ私事を後にして吾々下駄が狼の敷寢のあとの箒の樣に乱れてゐるのを手でづらりと揃へて置かれると話が出來て嘸滿足であらうが僕の位年を取るとあの頭を便所の方へ向けておかれるのが何よりつらい、腰が冷わてセンキが起るやら痔痛がするやら特に今年のやうにしみては僕の命も永い事はあるまいと思はれる、此僕の大嫌の列べ方が又馬鹿に人には都合がいゝんだ直ぐど御役に立つから」「そうだね君にそう云はれて見れば胸に落ちるそれから」と催促すると「まあ話をするに好都合といふ樣に吾々御同役の便を計るともなしに計ると其夜の內からめつきりと揃へるがどういふものか長く續かない、吾々の仲間が「又下駄を揃へよと注意されとさ」と噂してゐる內に木を葉の散つた樣になる。吾々は此處に居れと命令などされなくとも自分の都合不都合に關せず置かれた所から星は落ち日はかげゝとも月は傾かうとも寸分動く事でない、それを人間は僕等の都合など一切お構ひなく自分達の足に最好都合にすべくしておき乍ら夫を遂行せぬのだから實際憐むべきものだよ僕等は人間に使はれるから人間を尊重するが併し斯樣な事では餘り靈長らしくもなく思はれる併し其の注意を守らない人許りではない吾々の樣に涙のない者が催す位、感心な美しい心掛の人もある其人々は人が見やうと見まいと之は吾が義務であると思つてゐるでせう自分が小使をするといふ私事を後にして吾々下駄が狼の敷寢のあとの箒の樣に乱れてゐるのを手でづらりと揃へて而して後に自分の用事に取りかゝるこの樣な人が室長となつて室長會に居る時は「何某は何日手で整頓してゐた實に美しい心を君は持つて居る」と賞讃する併し各自がこの樣な美しい心掛にならうと務めない理由は「そんな汚い事をする奴は時代後れの天保錢だの蕊眞面目だのといふ評を得て一向はでない、それのみか先生の目に止らない爲か存外そういふ人は修身点が悪いからあゝつまらない惡事を陰で働いて得々としてゐる人は仲間にも持てるし、よし悪いことはあるが時代の流れに從はうといふ事になるからだ」「そう人間といふのは存外意志の弱いものだネ切角苦辛して書いた繪に墨を落して美しいと思つてゐるんだネ愈々情ないものだ」「この浮世の流は確かだ吾輩がこゝへ務めに來た當時と今と比較して居れば雲泥の差だ其當時はこんなに不仕鱈な事は見られなかつた夫を一年立つて僕の顏の色が益々黑くなるにつれ甚しく乱れて來た、斯の如く乱す奴をズルと僕は名付てゐる其ズルのするゝした事を一々は覺ねて居ないがツイ此朝の室長會の夜であつた注意が終つて僕等が整頓させられて一列になつてゐると外出歸りと見わ帽子を被つて用に來た、それが十一時頃だから誰も寢入始めと見わて森として淋しい位、スタイルを見ると例のズルだが今夜はその樣に頭を揃へて吾々が平身低頭してゐるからズルを極めまいと思ひの外ズルは何處までもズルだ、ぬぎばなしにしてスツと行つて仕舞つた、其次の室長會にズルめ何か仕損じたと見わて叱られたらしい、すると習慣は第二の天性でツイ上級生無視の態度をすると此便所の入口の向ふの室長が「ナニ此奴人が知らないと思つてこの前の室長會の夜は叱られると思つて逃げて外出して其歸りに便所へ行くから貴樣の事だからキツとズルをきめるであらうと窺つて居ると案の通り切角揃へた下駄を脫ぎすてゝ來たではないか」と云はれて「僕は揃へた心算です」と白をきる室長は「古人も壁に耳あり障子に目ありズルをきめすと白狀せよ」と云へど馬耳東風だ、吾々は何處でも見、何事でも聞く事が出來て重寶だが人間は不自由なものだとつく〳〵思ふ。

此ズルが一昨日の朝、僕の嫌といふのを無理無体に大便所といふ陰氣な所へつれ込んだ、するとアンモニアの臭が强く鼻を衝くズル奴、用事が長いので無聊と見わ板壁へ爪で「某なぐるぞ」と書いてニヤ〳〵微笑したがズル奴仲々之式の事では他き足らぬと見わキシカタシ鼻汁と痰を吐きかけ未だ腹の蟲が落ち付かぬと見わて後ろの板の上へ左曲りを丁度蛇がトグロを卷いた樣にお土產を殘して立ち去つた、此樣な事をした奴は昨年迄は掃除をしたものだ併し何時も水汲と箒持で案山子的に御役目を濟ましたに過ぎないブラシ持や下駄揃はした事がない自分がやらない程嫌ふべき事を他人に

させたい此奴の心はいかに現今の進歩した心理學者でも解決は出來まいと思ふ。夫にあきれる事は此奴が下級生に對する注意に掃除が汚いと云ふのだ今まで實際自分が立派に掃除をして來た人の言ならば注意の効果もあるが此の如き言行不一致の奴が掃除の注意のみか總ての注意に出しやばるから意地にも注意に反するのだと思はれる、此頃の掃除は水をまき散らす事が流行してゐる、之は誤摩化しでブラシを如何にも眞面目に用ひた樣に見せて實は掃きもせずブラシもかけない現今の簡便にして人の心持を良くする經濟的良法だそうだが此掃除を當直室長が檢査に來るがこの人も一寸御座つてゐるのか餘り御手際が美しいのに感心するのか「宜しい」との宣告をする樣だが吾輩には甚だ不足である、夏の蒸し暑い日の撒水は至極四周を涼しくして結構だが秋冬の間は眞平だピシヤ〳〵といやな音と共に飛沫が一二尺も上る殊に冬期と來てはすぐ結氷するから危險極まるものだ、小言は此位でよすが萬物の靈長にも隨分クヅがあるものだ吾輩は敢て教育宗教家を氣取るものではないが、人間をもつと〳〵改善しなくては駄目だとつく〳〵思ふ（完）

日記の飛々（上）

大坪時治

有待の身の流轉の世に處し、いかでか「風吹かば吹け、雨降らば降れ」の達觀をなし得べき。まして憂事繁き身にとりては尾花が末に風そよぐ、天地些末の事にも胸驚かす事多し。

一夜月なく雲霽れし冬の最中の獨寢に、懷郷の悶抑へ難く思親の涙はらはらと、旅寢の褥を話す事ありき。

かゝる時こそ何物をか執へて、憂懷の情を遣らんとするは、人情の然らしむる處なるべし。全素より歌舞音曲の樂に暗くして好愛する處は唯山川草木自然の妙のみ。

されば積る憂悶の情を慰むべく、夢破れたる褥をぬけて戸外に出づれば、碧瑠璃の大空に凍らんばかりの星影は、大地に瞬きて寂たる溪谷の夜景ひしと身に迫る。

星を眺めたる余は、來し方二十有餘年の思ひ忘じ難き父母の恩愛、かよはき母の面影などを回想しつゝ、ふと爪先の高きに心づけば身は既に興禪寺の境内にあり。

亭々たる檜の古木は人世幾多の興亡を見盡して笑ふが如く、寺前の鐘樓只石礎を留め燼餘の老梅僅かに義仲の遺愛を語るに似たりしばし傍への岩に腰打ち懸けて自然の妙理三世の因果を觀ずるに煩悶の情緒は忽焉として去り澄み渡る腦裏には一点の雲翳なく光風霽月新に天地の響耳に觸れ夢ともなく現ともなき境界に入る。

嗚呼、自然感應の雄大無邊にして人の心を慰藉する事のなんぞ大なる。

寓意片々

小縣生

○蕃茄

私は以前この蕃茄を非常に厭つたものだ、其の異樣な臭氣、生溫るい其の味は何うしても私の感覺には馴染まなかつた、私はそこで蕃茄は嫌いだと云ふので其後之れを手にした事はない、勿論之れが食ひたいといふ慾望も起らなかつたのであつた。

昨年の夏、故郷の小學校の農園に蕃茄が栽培せられて非常によく出來てゐた、赤い圓いのが房々として誠に奇麗であつた、私は此の外觀美に引き着けられ、且つは豫ねてこの果實が胃の消化を助ける健胃の効があるといふ樣な話も聞いてゐたので、是非一ッ食つて見ようといふ氣になつた、そこで一果を採つて見る、良くない臭ひは依然としてゐる、然し他の人が幾らも食ひ得らるゝものが、自分に食へないといふ筈はない、之れが厭だといふのは吾儘だ、矯正せなければならないといふので、無理に一果を嚥下した、味もやはり良くはないが然し心の持方一ッで厭なといふ程度は以前程ではなかつた、其後二果三果、と試みた、果せる哉、一果は一果より度を重ぬるに從つて非常によくなつて來て、初め厭だ嫌ひだと云つてゐたのは吾儘であつたのが知れた今では蕃茄と見れば食ひたいといふ慾望を生ずる迄に至つたのである。

○世間には是れに類した事が非常に多いものだ、口にしない先から嫌つて見たり、例へ口にもし手にもして見たにしても眞の味を極めないで厭だ嫌ひだと云つて、打ちやつて仕舞ふ、勉強もしなひで惡い点を採つて、吾は國漢は嫌ひだ、吾は數學は厭だといつても仕方の無い話だ、亦面小手を一度も着けないで已れば擊劍は嫌だ、已れは運動は厭だといふが如き、雜誌一冊繙かないで私は書を好まない、とか、何は厭だといふが如き又然りである、現に吾が反省によつて自覺した一賜である、役に立たない事ならいざ知らずそうでない限り好きな事が多ければ多い程、一生の得で有るといはねばならぬと思ふ、況んや勉强、体育、勤勞が學生修養上最も大切なる事であるに於てをやである、嫌ひな事は好きに成るまで繼ける此の場合少々辛捧といふ事が必要だと思ふ、暇さへあれば面小手も付けて見る、讀書もやつて見る、其度を重ねてゆく中には必ず其の行ふ趣味といふものが湧き出る筈である。

○柳に雪折なし

古い言葉に「柳に雪折なし」といふのがあるが誠に然りだ、東風に逢へば西へ、北風に逢へば南へ靡びく、上から壓せば下へ、聊かも抵抗しようとはせない、風の吹くまに〳〵丈餘の綠枝を靡かせてゐる、夫れで有るから雪にも風にも昔から傷つけられたといふためしがない、昨年未だ故郷に居た頃であつた隣より一本の糸柳を都合上吾家に移植する事にした、偖て根本を堀り採らうとして驚いたのは其の生い付きの强固な事である、つい引張り〳〵して居る中に眞二ッに裂けてしまつた、吾はこの糸柳一本によつて非常に良い教訓を得た、

○彼れが根抵を移さるゝに及んでは、懸命の力を以つて、抵抗した事で有る、若し夫れ單に柳が其の枝葉の安全を圖らんが爲めに、風雨や、雪などに左右されて反抗しないのみにては、彼の性は女性的である、優美的に過ぎない、彼の水中に生ずる、浮草が波に漂ふてゐるに相等しい自己の生存を保つ爲め、自己の根抵を確にしてゐる爲めには生命を賭しても尙やまない、其意氣込に立派な所がある、とにかく吾々青年時代は役にも立たない些細の問題に激昂し、茨棒を突き出して爭論をしてみたいものが、互に反感を抱き合つた處で何等の力も無い事だ、宜しく此の場合柳に風と吹き流す丈けの度量がなくてはならぬ。夫れ己れが生存を傷けられ、根抵を覆へされんとした時、渾身の力を以つて反抗し一歩も退かない、泰然として鬪ひ寸毫も侵かされない此態度は實に男性的にして賞すべきである。

○燕の巢

これは昨年蘇峽に來て見た事だ、軒に燕が巢を營んでゐるのを見て、子供が負けぬ氣になり、泥を運びそれを塗り上げて眞似てゐる、鳥の羽、藁屑、髮の毛等を何處から拾ひ來たのか中に入れて、拵へ上げたのを見ると中々奇麗に出來てゐるので、知らぬ子供であつたが、褒めてやると子供は得々として喜んでゐた、然し中はと見るとこれは粗末なもので、とても較べものにならぬ雲泥の差がある、小供は「外さへ良ければ中は何うでもよい」と云ふ、燕に云はしたら何と云ふだろう？

僕はこゝに於て大いに感ずる所があつた、

○萬物の靈長だと威張る人間、宜しく一小禽たる、燕に習ふべしだと思ふ、即ち先の小供の言は如何にも常人の弊を發揮して居る。將來なす所あらむとする吾々青年はよろしく外觀の美よりも內部の充實につとめなければならぬと思ふ。

雜報

學校便り

○飯島教諭出縣　飯島教諭は二月廿四日より本縣廳內に開催の縣下農業技術員會に列席し廿七日歸校せり

○學年末試驗　は三月八日開始十六日終了

廿三日証書授與式擧行の筈

○校友會役員撰擧　二月十六日來年度校友會役員選擧を行へるが開票の結果左の如し但し高点者三位迄を取り餘は省略す

庶務部
百三十一票　米久保春雄
九十四票　篠原將英
四十一票　宮澤末雄

雜誌部
百十五票　鷹見勳
九十四票　箕部覺明
五十三票　大坪時治

辯論部
百〇四票　井原邦雄
七十七票　佐塚甲子
七十一票　井上新次郎

擊劍部
百二十八票　吉澤豐一
百〇四票　丸山林一
三十四票　藤澤甲子十

庭球部
百二十八票　小野澤四郎
九十二票　佐藤誠一
四十九票　大木多喜雄

弓術部
百十一票　野本美嘉
九十八票　坂卷利一
四十二票　仲谷馨

遠足部
百二十二票　青木忠太
百十票　米山芳郎
三十票　水野鎌一郎

柔道部
百二十四票　伊東近良
八十七票　唐澤正義
六十票　星加晴雄

柔道部
三級下
瀧澤銀治郎
細窪友一郎
四級上
池口福雄
月田喜代佐
四級下
唐澤繁夫
島田德之助
矢崎清海
下平三雄
星加正雄
三村善三
下島俊二
杉山義次
北川春
古根勳
今井徹郎
井上寛一
原川只一
今井忠雄

○柔劍道進級者証書授與。柔劍道進級者には今回二月十一日付を以て進級証書を授與せり人名左の如し

柔道部
三級
伊東近良
井上寛一
野本美嘉
澤唐正義
星加晴雄
村上道信
丸山林二
草間勝佑
矢野邦雄
井原邦雄
今井忠雄
三村善三
宮下武夫
霞上正次郎
古畑要司
山崎多聞
花村隼則
奥村安太郎
長田克己
前野秀宗

劍道部
三級上
內田新之助

○劍道部稽古　二月廿六日、星見教師は本縣擊劍教師小泉氏を同伴來校せるを機とし部員の稽古を行ひ最后に里見、小泉兩師の模範試合を爲し終て紀念の撮影を爲せり

○辯論會　大正六年度最終の辯論會は二月十六日、役員選擧當日を以て擧行し各自熱辯を振ひ棹尾の盛況を見せたり今左に當日辯士及演題を揭ぐれば

一、開會之辭　唐澤繁夫君
一、偶感　紺田孝三君

一、寬恕の精神　霞上正次郎君
一、森林視察　長崎信一君
一、柔道につきて　長田克巳君
一、偶感　山本茂君
一、偶感　鈴木靜夫君
一、偶感　田中一君
一、靜岡縣の林業に就て佐塚甲子君
一、本校を國立にするには　內田新之助君
一、偶感　唐澤繁夫君
一、生の道程と愛　小澤安親君
一、現實の歩み　今井徹郎君
一、閉會の辭　伊東厚君

會員消息

○坂田勘太郎君　今回日向、西臼杵郡椎葉村尾崎住友製材所に轉勤せられたり

○成瀨義郎君　今回愛媛縣新居郡西條榮町保護區に轉任せらる

○喜多村明君　帝林木會支局上松出張所伐木掛に任命せらる

○加藤源一郎君　岐阜歩兵聯隊に於て第一次勤務演習勤務中の處此程終末試驗に及第し鄉里川邊町に歸省せられたり

○向井辰次郎君　昨年鄉里開田村に於ける千村家を繼がれ千村と改姓せられたるが現に同村助役たり

○下平佐門君　豐橋歩兵聯隊に於て第一次勤務演習勤務中の處此程終末試驗に及第し歸省の途次母校を訪問せらる

編輯部より謹告

料峭たる曾峽の春寒も昨今漸く退き、萬朶の紅葩は未だ笑はずと雖、駘蕩たる春風に嬝々として山野に漂り、將に陽春の佳季を迎へむとするにあたり、校友諸兄には益々御清祥の段奉賀候。さて、過ぎ行く月日には關守なく、流れ〳〵て昨日の瀨は今日の淵となり、早くも不肖等諸兄の御推薦を蒙り編輯の大任にあたり申候てより、こゝに一星霜、誌上に何等の見るべき無く、將又貢献するところも無く、平々凡々として本部を去るにあたり、今更乍ら、黃嘴乳臭思想に何等の清新奇警なく、筆に何等の精采生氣なきを、慚愧に思ふ次第に有之候。されど幸にして、そが責を塞ぐ事を得たるは實に、顧問先生始め校友諸兄の熱誠なる御盡力に他ならずと深く感謝致候、茲に不肖等本部を去るにあたり、缺陷多き一歲を顧みて、無責任なりし罪を謝し、併せて將來も、益々御指導あらむ事を切に希望致す次第に有之候。

横井正守
星加正雄

會員諸君に謹告

豫て募集中の高樋君弔慰金及び大塲福山兩教諭並に加藤征矢野兩書記謝恩金は三月十日限り締切とし寄贈者の芳名金額を記せる冊子を金額に添へて發送致候間左樣御諒知被下度候

三月　校友會

大正七年二月廿三日印刷
大正七年二月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編輯兼發行人　安井正夫
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
印刷者　川崎本雄
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
印刷所　川崎印刷所
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　蘆澤書店
定價三錢

森林保護いろは盡し

い、入會の整理は早くするがよし
ろ、老樹名木を保護尊重するがよし
は、禿山は砂防の設備をするがよし
に、ニセアカシアは水防と砂防に植ゆるがよし
ほ、保安林の取扱を誤らぬがよし
へ、平地林も猥りに開拓せぬがよし
と、土地の狀況に依り適當の保護法を講究するがよし
ち、竹林の經營は水防と防風とを兼ぬるがよし
り、林產物の記號印章を取締るがよし
ぬ、拔切りを適度にするがよし
る、類燒の危險を豫防するがよし
を、落葉の採收を猥りにせぬがよし
わ、矮林は切株を大切にするがよし
か、開墾禁止制限地の取締を嚴にするがよし
よ、用材林は枝打に注意するがよし
た、煙草の吸殼を山野に投棄せぬがよし
れ、列狀擇伐は矮林に適用するがよし
そ、霜害と旱害は苗木時代に注意するがよし
つ、蔓切りは新植後數年間怠らぬがよし
ね、鼠の繁殖を防ぐにはチブス團子を用ふるがよし
な、苗木の運搬取扱を活物同樣に心懸くるがよし
ら、濫伐暴株を警戒するがよし
む、無願開墾の取締は嚴重にするがよし
う、兎狩りを勵行し兎害を防ぐがよし
ゐ、頂きは防風のため伐り殘すがよし
の、野火の豫防に注意するがよし
た、多くの村民に山林保護を委ぬるがよし
く、草刈の時期と方法とを誤らぬがよし
や、瘠地の落葉下草は採收せぬがよし
ま、松毛虫の驅除を怠らぬがよし
け、境界線を明にし境界標をたつるがよし
ふ、風害に注意して作業するがよし
こ、荒廢地復舊工事の速進を計るがよし
え、營林監督は寬嚴宜しきを得るがよし
て、天然林の育成保護を誤らぬがよし
あ、愛林思想の普及を計るがよし
さ、散生地は速かに補植するがよし
き、協同一致山野の保護に當るがよし
ゆ、雪倒れの林木は早く手當するがよし
め、名所舊蹟の風致林を大切にさすがよし
み、未立木地の造林は之に防火線を設くるがよし
し、森林法の精神を徹底せしむるがよし
ゑ、遠慮あるものは永久の保續に注意するがよし
ひ、火入及焚火取締規則を守るがよし
も、木標又は制札を毀損せぬがよし
せ、施業按を立て之に依り作す業るがよし
す、杉の赤枯病驅除にボルドー液を撒布するがよし

（安藤珍竹庵主人作）

諸官衙御用達
長野縣木曾福島町
蘆澤書店
電話四〇番

木曾のなかのりさん
〔特價金貳拾錢〕

石版活版印刷
川崎印刷所
長野縣木曾福島町
電話三十番

祝開業四十周年紀念出版
赤星長野縣知事題字
本田林學博士序文
嶋崎藤村先生序文
木曾　丸山梓水著　特價五拾錢
原色寫眞版頗る美麗好評噴々
紅葉の木曾　金拾五錢
▲繪はがき六枚一組▼
長野縣木曾福島町
藤森書店
振替東京八一七七番
電話三十九番